二〇二二年八月五日

葛刈りて渓の奈落のたしかなる　澄　子
高跳びを競ふかのごと沖の鰯　きよえ
島山の海へなだるる青田かな　もとこ
激戦のかの地は如何に星月夜　たか子
夕焼空煽つ岬の大風車　素　秀
夕星を吾子と探せる涼みかな　ひのと
あらくさと片すは惜しき葛の花　澄　子
冬瓜の転げ落ちたる猫車　智恵子
滝壺に浮き沈みせる桐一葉　千　鶴
古団扇手に手に村の集会所　うつぎ

二〇二二年八月四日

遠雷のひびけど雨の恵み無し　たか子
戦死せし二十歳の御魂墓洗ふ　千　鶴
錆び癖のある包丁や鱧を切る　ひのと
舌だして色競べあふかき氷　ふさこ
ほつほつと漁火灯る沖の秋　はく子
菩提寺の大瓶に咲く蓮の花　こすもす

二〇二二年八月三日

鉄板の灼けしごとくにアスファルト　満　天
独り身となりたる家や蝉を聴く　たかを
新雪を崩すが如くかき氷　うつぎ
蓮池の大和三山そびらとす　明日香
空蝉をとらんとすれば抗ひぬ　せいじ

二〇二二年八月二日

はまなすの島へ水脈引く舟ひとつ　ひのと
大胆にこぼしつつ盛るかき氷　うつぎ
甲板に小さき酒宴や星涼し　ひのと
父母の墓石を洗ふ白雨かな　素　秀
水打てばミントの香る夜の庭　あひる
こめかみに卍マークやかき氷　隆　松
打つ水に鉢のトマトの武者震ひ　そうけい
沖遥か沼島に土用波高し　千　鶴

二〇二二年八月一日

氷嚢のくたりと温き晩夏かな　ひのと
手花火の庭に聞こゆる遠花火　なつき
マンションの百灯それぞれ夜の秋　満　天
五百歩に満たぬ歩数や酷暑今日　こすもす
畑仕事終へきし夫にまづ麦茶　明日香
熱の子の遠き眼差し祭笛　ひのと
漕ぎいでて湖上花火につつまれぬ　もとこ
大空を飛び交ふ森の蝉つぶて　せいじ

二〇二二年七月三一日

袖口の濡るるにまかせ金魚追ふ　素　秀
ただいまに返事の無くて昼寝中　あひる
伊吹峰を見下ろして立つ雲の峰　隆　松
銀輪を先導するは赤とんぼ　せいじ
軽鳧の子の吹き飛びさうに走りけり　あひる

岩肌に紙垂震はせて清水湧く　ひのと
パノラマに大湖とり巻く雲の峰　隆　松
土用干使ふあてなき旅鞄　なつき
共白髪相労わりつ暑に耐ふる　たか子

二〇二二年七月三〇日

朝蝉のライブ果てたる静寂かな　うつぎ
梳いてやるお泊りの子の洗ひ髪　なつき
履かれしは蚯蚓のミイラ日向道　隆　松
家を守るやに門柱の蝉の殻　せいじ
噴水の緩みたる時我もまた　うつぎ
亡夫の座右としたる書を曝す　む　べ
膝痛を忘れてしまふ踊り好き　はく子
余生なほ多忙の日あり夕端居　千　鶴
銀輪を乗り捨ててゆく夏野かな　ひのと
水櫛をあてし老妓の所作涼し　澄　子
百歳の母へ桔梗の母首飾り　そうけい
雲梯を掴む右手や夏の空　ひのと
残業のビル窓にみる花火かな　もとこ

毎日句会みのる選・二〇二二年八月七日